

令和 4 年 6 月 1 日現在

機関番号：37111

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23031

研究課題名（和文）革命から保守へ、その分水嶺を探る 後期ロマン主義における「フォルク」の意義

研究課題名（英文）Where is the watershed between revolutionary thinking and conservatism? From the perspective of the conception of "Volk" in the time of Romanticism

研究代表者

須藤 秀平（Suto, Shuhei）

福岡大学・人文学部・講師

研究者番号：40847406

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、18世紀末に活躍したジャーナリスト、ヨーゼフ・ゲレス（1776-1848）の思想および社会認識について、民衆や民族を意味する「フォルク（Volk）」概念という観点から解明することにあつた。明らかになつたのは、彼のジャーナリズムが、「市民的公共圏」から排除されがちな「フォルク」を含めた形で公共圏を再構成しようとするものであつたということである。その特殊性を明確にするために、「世論」および「公開性」に関する当時の言説の分析や、当時の作家・思想家のフォルク観の調査に取り組み、計三本の論文を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、初期ゲレスのジャーナリズムの歴史的意義について、「フォルク」および「公開性」の概念に着目して分析することで、政治思想のみならず公共圏イメージという文化史的観点から考察したという点にある。それにより、いまだ十分とは言えないゲレス研究の端緒を開いた。また同時に歴史社会学的問題として、18世紀末の公共圏モデルの再検討を促すことにも寄与した。加えて、18世紀末の啓蒙主義サークルであるベルリン水曜会における議論を精査し、当時の知識人による「真実/真理（Wahrheit）」の捉え方を明らかにしたことにより、現代に指摘される「ポスト真実」の問題を歴史的に考察するための視座をもたらした。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to interpret the thought and the understanding of the society by the journalist in the end of the 18th century, Joseph Goerres (1776-1848), from the perspective of the conception of "Volk". It has been revealed that his journalism aims for restructuring of the public sphere, by letting the "Volk" which is often excluded from the bourgeois public sphere join it. In order to clarify the specialty of his journalism, the discourse about "public opinion" and "publicity" was analyzed and the views of "Volk" in the same period was surveyed. As a result, three articles on this subject were published.

研究分野：近代ドイツ文学

キーワード：ゲレス フランス革命 公開性 世論 公共圏 啓蒙主義 ジャーナリズム

1. 研究開始当初の背景

本研究は、これまで政治的反動とみなされ、正当に評価されてこなかったドイツ後期ロマン主義に新たな光を当てることを目的に開始された。

そもそもロマン主義を反動的とみなす見方は、ハインリヒ・ハイネ(1797-1856)ら、同時代の急進的思想家たちによってもたらされたものである。その後、現在までの研究の中で、実際にはロマン主義が啓蒙的批判精神を受け継ぐ運動であることや、さらには革命思想とも親近性を持つことが明らかにされてきたが、それらの大半は考察対象を初期ロマン主義に限定しており、後期についてはやはり反動的とみなされるにとどまっている。

たしかに後期ロマン主義者の多くは復古的なウィーン体制のもとで官職に就き、その点で反動体制に加担したと言えるが、それでも彼らが思想においても反動的であったとは限らない。少なくとも、申請者はこれまでの研究ですでに、後期ロマン主義の詩人で司法官僚のヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフ(1788-1857)が、歴史主義の立場から革命を批判しながらも、決して既存の権利に固執せず、改革派が提示する以上に進歩的な改革を求めていることを明らかにしていた。ここからわかるように、後期ロマン主義もまた決して一義的に評価しうるものではない。

これをふまえ申請者は、後期ロマン主義の時代に活躍した作家・思想家の著作を分析することで、進歩派か守旧派かという二項対立図式では捉えきれない思想的内実を明らかにする必要があると考えた。ロマン主義の意義について、後期も含めた形で問い直すことでその特有の歴史観や社会認識が明らかにできれば、西欧思想史におけるロマン主義や保守主義の布置が変動することとなる。これは共時的現象としてのフランスやイギリスのロマン主義とドイツ・ロマン主義との複雑な相互関係を捉え直すことにもつながる。

2. 研究の目的

本研究の大きな目的は、ロマン主義を反動とみなす従来の評価を批判的に再検討することにある。そのために、反動的なロマン主義者とみなされる思想家・ジャーナリストのヨーゼフ・ゲレス(1776-1848)を対象に、以下の点を明らかにすることを目指した。

(1) 革命思想から保守主義への転換点を探る。

ゲレスは晩年のカトリック主義、神秘主義の特徴からしばしば反動的な思想家とみなされるが、1790年代における彼の初期の活動はフランス革命思想をドイツに取り入れることを目的としていた。そのゲレスが晩年に保守主義に転じたのだとすれば、それがいつどのようにして起こったのか。その転換点を探るとともに、その理由を明らかにしなければならない。

(2) ゲレスにおける保守の意味を歴史的に解明する。

初期には革命思想家であったゲレスが保守主義に転じたのだとすれば、その転向の内実、すなわち彼が同時代のいかなる現象を危惧し、それに対しどのように対処しようとしたのかを明らかにしなければならない。それは歴史的に、すなわち他の西欧諸国に比べて国民国家の形成が遅れていたドイツ語圏の当時の政治・社会状況をふまえて理解する必要がある。

(1)(2)の問題に対処するため、申請者は「folk (Volk)」の概念に着目した。folkとは革命思想においては主権を持つべき「人民」を指す言葉であり、国民運動においては統一されるべき「民族」を指す言葉である。こうしたfolkをゲレスがどのように捉えていたかという点で、申請者はすでに、彼がfolkを「世論」と重ねていたことを明らかにしていた。要するに、ゲレスにおいてfolkとは、知的エリートによる教育の対象や目指すべき理念にとどまらず、自ら「声」を発することで知的エリートの言論に影響を与えうる社会的力なのである。従来注目されてこなかったこのfolk観を応用することで、後期ロマン主義の文芸活動に新たな意義を見出すことが、本研究における当初の目的であった。

3. 研究の方法

ゲレスの「保守化」の過程を追い、革命思想から保守主義への転換点を探ろうとする本研究が当初扱おうとしていた主たるテキストは、ゲレスがナポレオン戦争後の復古体制の中で革命について論じた政治的パンフレット『ドイツと革命』(1819)および『ヨーロッパと革命』(1821)であった。

しかし、実際に資料収集と先行研究に関する調査を進める中で、ゲレスが革命思想を展開していたとされる初期の活動についても、十分に研究がなされていないということに気がついた。そこで、ゲレスの初期ジャーナリズムの特殊性とその意義を明らかにすることを第一の目標とし、具体的対象として、ゲレスが「ジャコバン派」すなわち親革命派として創刊した『赤新聞』(1798)を取り上げることにした。こうして、当時のドイツ語圏において公共の言論空間がどのように構想され、機能していたのかを探ること、またそれがゲレスにおいてはいかなる思想に支えられて

いたかを考察することが最初の課題となった。

4. 研究成果

一年目(令和元年度)には、前提知識となる事柄を把握し、諸概念を定義することに注力した。特に、フランス革命に関する従来の研究史およびドイツにおける革命思想について整理することを中心的な課題とした。

まずは近年のフランス革命史研究の動向を調査した。それにより、マルクス主義的思想史・経済史からアナール派による文化史へという歴史学の推移と重なる形で、フランス革命研究の手法も大きく変化してきたことを確認した。これに関するまとめと所見を福岡大学人文学部領域別研究活動報告会において発表した。また、このときの成果をもとに、ミネルヴァ書房『ドイツ哲学・思想事典』の項目「フランス革命とナポレオン戦争」を執筆し、現在校正中である。

次に、18世紀末から19世紀初頭にかけて、人々の意識にいかなる変化が生じたのかを、「自由」の概念に注目して考察した。それはフランス革命直後のドイツで発表されたフリードリヒ・シラーの美学思想と、アイヒェンドルフの小説における表象を比較考察する形で進められた。その中で、「遊戯」あるいは「劇」や「演奏」を意味するSpielの概念が、革命期とその後のロマン主義期とで大きく変化したことを発見した。また、その変化が、芸術が天才による自律的活動から受容者を含めた他律的・社会的活動へと変化した経緯と重ねて理解しうることを、アイヒェンドルフのフォルク観を分析することにより明らかにした。これにより、フランス革命期とロマン主義期のフォルク概念を比較考察するための視座を得ることができた。この成果となる論文「「遊び場」に立つ民衆——Spiel概念の変容とアイヒェンドルフのフォルク観」を、日本アイヒェンドルフ協会『Aurora』第37号に投稿し、査読を経て掲載された。

さらに、他大学の研究者との共同研究の場として「ドイツ保守思想研究会」を立ち上げ、数度の研究発表会をおこなった。その中で、ドイツ保守主義に関する基礎研究に共同で取り組みながら、ドイツに特有の現象とされる20世紀初頭の保守革命について意見交換をした。また、保守革命に関する重要な基礎文献でありながら邦訳のないRolf Peter Sieferle: Die Konservative Revolution (1995)の共訳にも着手した。しかし、この研究会はその後、新型コロナウイルス感染症の影響で休止せざるをえなくなった。

二年目(令和二年度)には、ドイツにおける革命思想の展開を探るべく、18世紀末のドイツ語圏におけるジャーナリズムと世論をテーマに研究を進めた。収集した資料のうち、ヨーゼフ・ゲレスのテキストおよび1790年代のラインラント地方におけるジャコバン派の新聞の読解に注力し、特にゲレス『赤新聞』(1798)を対象に、彼のジャーナリズム活動の理念について考察した。この時点で、保守主義に関する思想的研究から、ジャーナリズムの実践を含めたメディア史的・文化史的研究へと重心がシフトしたこともあり、そうした諸分野の先行研究にも目配りをしながらかつては進められることになった。

このときの成果として、ゲレスのジャーナリズムが、それまでの知識人向けの新聞のように理念的・思想的な主張に終始するのみならず、より実践的な活動として展開されていたことを明らかにした。それは「公開性(Publizität)」という概念の捉え方の違いとして表される。すなわち、同時代にプロイセンではカントが「公開性」を、政治と道徳を一致させるための条件と捉えていたのに対し、ラインラント地方のゲレスにおいて「公開性」とは、当地を占領するフランス行政局の不正を「公表する」という実践的な活動をも含むものなのである。このことについて、日本独文学会西日本支部研究発表会で発表した。

三年目(令和三年度)は、これまでの成果をふまえ、発展的な研究に着手した。

まずは『赤新聞』における「公開性」概念を、歴史的な文脈に照らしてより詳細に分析した。同時代の言説として、カント『永遠平和のために』(1795)とG・フォルスター『パリ素描』(1793-94)を取り上げ、両者のテキストを比較することで、世論に対する信頼とおそれという、当時の世論イメージの二面性を浮き彫りにした。さらにこの二人のテキストとの対照から、ゲレスが世論を一元的に捉えられないものとみなし、そうした認識からより流動的な言論空間を構想するに至ったことを明らかにした。すなわち、ゲレスは「農民」を新たな読者として想定することにより、フォルクを含めた形で公共圏を拡大しようとしたのである。この成果は論文「公共圏の再構成——ゲレス『赤新聞』(1798)における「公開性」概念の歴史的な文脈」として、査読の上、日本独文学会西日本支部『西日本ドイツ文学』第33号に掲載された。

その後、18世紀のジャーナリズムにおいて「真実/真理(Wahrheit)」という言葉がどのように用いられたのかをテーマとし、ゲレス以前の啓蒙主義を代表するベルリン水曜会における議論を精査した。それにより、当時「民衆」すなわちフォルクを教育する立場にあったベルリン水曜会の会員たちのあいだで、「真実」を「民衆」に伝えるべきか否かという点で意見が分かれていたことを、テキストに即して明らかにした。この成果は論文「真理に惑う啓蒙主義——ベルリン水曜会における「真実/真理」言説の差異」として、福岡大学研究推進部『福岡大学人文論叢』第53号に掲載された。

研究開始時点で掲げていた、ゲレスの保守思想の歴史的意義を明らかにするという目的は、残念ながら達成されなかったと言わざるをえない。その原因として、一つにはゲレスの思想および活動について、初期の著作から順を追って調査する必要が生じ、後期の著作にまで行き着くこと

ができなかったという消極的問題がある。しかしもう一つには、ゲレスのジャーナリズム活動について、思想的観点からのみならず、実践を含めたメディア史的・文化史的観点から捉える必要性ないし可能性を見出したという理由があり、これは積極的な成果をもたらすことにもつながった。特に「真実」概念の展開について、フォルク観という観点を導入しつつ調査する中で、現代に指摘される「ポスト真実」に通じる状況が18世紀にすでに見られることがわかったことにより、今後メディアにおける「真実」の問題を歴史的に考察するための重要な視座を得ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 須藤秀平	4. 巻 第33号
2. 論文標題 公共圏の再構成 ゲレス『赤新聞』（1798）における「公開性」概念の歴史的文脈	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西日本ドイツ文学	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須藤秀平	4. 巻 第53巻第3号
2. 論文標題 真理に惑う啓蒙主義 ベルリン水曜会における「真実 / 真理」言説の差異	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福岡大学人文論叢	6. 最初と最後の頁 791-809
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 須藤秀平	4. 巻 第37号
2. 論文標題 「遊び場」に立つ民衆 Spiel概念の変容とアイヒェンドルフのフォルク観	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Aurora	6. 最初と最後の頁 91-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 須藤秀平
2. 発表標題 J・ゲレスの初期思想におけるメディア、公衆、世論
3. 学会等名 日本独文学会西日本支部
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------